



sousei akita

曹青秋田

秋田名「佛」 ～3教区・蔵立寺(伊藤涼平事務局長師寮寺)～





会長・事務局長 インタビュー

「今期二年間を振り返って、全体としての感想を頂戴したいと思えます。

鮎川会長：この二年間、伊藤事務局長はじめ、執行部、代議員の皆さま、会員の皆さまの多くのご協力、諸先輩方のご支援をいただき、任期を全うすることができました。本当にありがとうございます。今期、一年目の五月にコロナの類型が変わり、コロナ禍で制限があった頃よりも昔のような活動ができるのではないかとということから、今期のテーマを「繋ぐ」としました。コロナ禍を経て、再び相對して会えるような機会を、青年会会員同士や、他の団体等々と繋ぐというビジョンで進めて参りました。それから一般の方で関心のある方が仏教に触れる機会というのを意識して活動してきました。まだまだ足りないところはあったかもしれませんが、自分なりにテーマを持つて会の活動を考えて、今までやってきました。

伊藤事務局長：正に会長の仰った通りそのものだと思います。様々な方と繋がり、様々な活動を行う事ができました。成功の要因が大きかったのは、会長のお人柄であっ

たのではないでしょう。またテーマの通り方針も終始一貫したものであったので、会員も安心して参加できたと思っております。

「次に、この二年間に世の中では様々な出来事がありまして、何と言っても能登半島地震が曹青とリンクした行事としては大きかったと思います。他の様々な世の中の出来事に関して、曹青の取るべきスタンス、役割についてお聞かせください。

会長：今期については、一年目から秋田県内でも大雨災害があつて、二年目も同じような時期に大雨の災害があり、まずボランティア、自分たちでできることは何かということ、活動してまいりました。そういった中で、能登半島地震が発災して、遠方ではありましたが、会員何名かと一緒にボランティア活動をさせていただきました。また、一般の方とも触れ合えるような行事も行いまして、そういった意味でも、やはり私たちが僧侶として、様々な方とどういった関わり方ができるのかということ、は、すぐく考えさせていただくことができました。今期であったと思います。

事務局長：会長の仰る様々な方との関わり方が重要かと思えます。世の中の多様なニーズに僱侶として応えていく、その為にアンテナを張り様々な角度から試みる。曹青としての強みはフットワークの軽さ、思い立ったときにすぐに行動できる事だと思います。今期は災害に際し最大限に発揮されたのではないかと思います。

―ありがとうございます。この二年間を踏まえてご自身の二年間の経験から、次期会長、次期事務局長にアドバイスをお願いします。

会長：アドバイスといえば大変おこがましいのですが、仲間がたくさんいるので、そこを強みとして、楽しく仲良くやっていくことが、一番長続きしていくことにつながるのではないかな、というふうに思っています。

―事務局は結構やるのですが、たくさんあるというイメージですけれども、その引き継ぎも大変だったのではないですか。

事務局長：そうですね。前事務局長さんの器が大きかったので大分こ

ぼしてしまっただけかもしれないが、事業が円滑に進むよう精一杯取り組ませて頂きました。会長の意向が形になるよう、全力で支え、楽しむ、それに限ります。

会長：本当にたくさん支えていただきました。

―では最後に、ご自身の経験から、若い会員にこういうことを頑張っていたらいいとか、こういうスタンスで臨んだらいいとか、会長・事務局長まで勤めた経験も踏まえて、若手へのメッセージをお願いします。

会長：青年会員として活動してきて、やっぱりこの会に参加することとでいろいろな人と出会えたり、関係性が築けるといいですか、刺激をもらったり、いろいろな面で助けてもらったりという、その繋がりができると思えます。ぜひ、研修・ボランティア活動・会議、まずは参加してみて経験してもらおう、一緒に経験して同じ時間を過ごすということ、得られるものはたくさんあるかと思うので、足を運んでいただければと思っております。

事務局長：私も全く同意で、全会員

は檀務の傍ら活動している以上、なかなか活動や会議に参加することが難しい方が大勢いらっしゃると思いますが、思い切って身を投じていただいて、参加してみたいと思いますので、ぜひ参加してください。

―この二年間は主に秋田市の大雨災害があつて、能登半島地震があり、さらにまた大雨という、災害と向き合う青年会だったと思います。そんな中で一生懸命頑張ってくださいました。どうもありがとうございました。

(聞き手・佐々木耕志)

書籍紹介

平川彰・著 ※現在は絶版

『現代人のための仏教』

(講談社現代新書)



本書は、インド哲学並びに佛教

学研究の泰斗・平川彰(一九一五〜二〇〇二)が、インド・中国・日本の佛教を総覧したうえで、一般人向けに佛教のエッセンスを解説したものである。平川は東大教授を退官後に早稲田大学文学部教授に就任し、それまで中国・日本思想のみだった東洋哲学科内に、新たにインド関連の研究分野を切り開いた。私が学部生当時の教授達は、ほとんどが平川の教えを受け、名著だ」と称賛していた事を思い出す。五十五年も前の著作であり、長嶋や王のような、昭和元禄、学生運動など、本書に登場する『現代』の例自体がもはや歴史の一コマであるが、それを踏まえても本書は名著だと思う。ただ、本書は題から想像されるような平易な内容では決してなく、むしろかなりハイレベルであり、これを薄い一冊の新書にまとめた平川の学識にはただ圧倒された。絶版だが、ネットなら入手しやすいので、興味を持たれた方はお読み頂きたい。

(佐々木耕志)



遺族支援の基本と

実践について――

「祈りのつどい」に参加して

令和六年九月八日、東京寺様（秋田市金足岩瀬）を会場に、「祈りのつどい」が開催されました。日曜日という忙しい中、会場を提供していただいた東京寺様の多大なるご協力のもと、袴田俊英老師、涌井眞弓先生のご指導により、無事お勤めすることができました。

コロナ禍でもオンライン配信で開催されてきた「祈りのつどい」ですが、対面形式での開催は令和元年度以来、五年ぶりとなりました。当日は多くのお参りの方が来られ、大切な方の思いとともに法要に臨んでいらつしやいました。参加僧侶に対しては、涌井先生から「宗教者が携わる死別体験への支援」という演題で、グリーンフケアの講義をいただきました。

グリーンフとは「大切な人や身近な人を亡くしたとき、または大切なものを喪失したときに起こる

さまざまな反応や感情」であり、だれしもが抱える感情でありますが、時には危険な状態に陥る可能性があります。心理的、社会的に遺族が孤立しないように支援体制が求められます。悲しみへのケアがあると、早期に自分の混乱とその整理、亡くなった方の生きた意味・自分の生きる意味、人生の意義などに気づくことができ、前向きに人生を捉えなおすきっかけにもなります。僧侶である私たちにこそ、大切な方々、グリーンフを抱えた方々に寄り添う姿勢が必要であります。

涌井先生はグリーンフを抱える方々に対し、安心して自分の本音を語る機会を提供し、『生き直す力』をお伝えする大事さを教えてくださいました。そのためには、僧侶やお寺が信頼される存在であるべきであり、安心、安全な場で真摯に聞く事に心がける必要性、グリーンフケアに携わる事は

「配慮ある支援」であり、同時に守秘義務を徹底すべきことをお伝えくださいました。

先生は「傾聴は相手の気持ち尊重し、耳を傾けること。気持ちをじっくり聴いてもらうことで、一人ではないという安心感を与え、孤立を和らげることができ。お寺を仏さまと人々をつなぐ場としていつてほしい」とお伝えくださいました。

種々の御詠歌とともにお勤めされたご法要の後には、袴田老師よりご法話がありました。老師は息子さんを自死で亡くされた相談者との交流を通じ、自分の息子は、死後どのように過ごしているのか？という質問を受けたお話をされました。その中で「成

仏するというのは仏さまに近づいていく」という言葉があり、参加者の方が共感されている様子が印象的でした。

涌井先生、袴田老師からは、苦しみを抱えている方に真摯に向き合い、心で伝えることの大切さを教えていただきました。変わっていく時代の中で、変わらないことこそが、一仏両祖がお伝えになった仏教であると思います。お寺や僧侶が、社会的枠組みの中でただ存在するだけでなく、檀信徒や地域の方々、ご相談に来られる方々に寄り添い、力になれる存在でありたいと思いを新たにする機会となりました。

（研修部長 鈴木慶道）



住職学研修

十一月十四日、宗務所禅センターで住職学研修を行いました。当日は、炊き出し研修・実食、講演の内容で開催。講演は「能登半島地震支援活動の実際について」と題して、昨年元日の能登半島地震発災以来、現地に何度も足を運び活動されている秋曹青会員で全国曹洞宗青年会副会長の第一教区勝平寺高柳龍哉師に講師を務めていただきました。被災地ボランティアの現状と、実際の活動についてご講義いただき、被災地に寄り添った支援の在り方について、考える機会となりました。また、宗務所寺族会様と宗務所婦人会様にもご案内し、学びを共有しました。

当日、炊き出し研修で、中心となって進めてくださった矢萩宗淳師よりご寄稿いただきました。

『住職学研修』 炊き出し実習に寄せて

秋晴れに恵まれた当日、宗務所駐車場にて、二十数名の会員宗師の協力のもと、炊き出し研修が開催されました。

この度の研修会では、災害時における炊き出し活動を想定し、いざという時に比較的簡単に短時間で調理できるアルファ米や缶詰などの保存食に着目し、準備から調理、実食までの流れを実習いたしました。

温かい食事の提供は疲労困憊した人々の心身を支え、かつ災害関連死を防ぐためにも有効な手段となります。

行政面では内閣府により、現在施行されている『災害救助法』において、避難所生活者一人につき、自治体へ給与される一日三食の費用限度額は一二三〇円以内と指針が定められています。この実務展開にあたり、都道府県側が非常に大きな負担を抱えていることが指摘されています。

長期的に被災者の健康を支えるために、食事支援を含む有志ボランティア活動が切実に求められる所以が理解できます。

今研修会では、たんぱく質と食物繊維の摂取を念頭に、アルファ米わかめご飯と豚汁、豚肉の生姜焼き、小松菜とツナのお浸し、お持ち帰りにシラス梅おにぎりという献立といたしました。また水が使用できない環境を見据え、なるべく事前に食材の切り込みを

済ませてから調理に臨みました。

非常時の主食には『アルファ米炊き出しセット五十食分』が便利です。正式な注水量は水八リットルですが、この度は約十%増量することにより、出来るだけ自然な炊き上がりに近づけることができました。

実食の感想として、献立には特別感がありました。考慮すべき課題は嚥下障害やアレルギーの心配、老若男女に適した食分量、加えて地元食材を取り入れながら、予算に準じつつ変化に富んだ献立をどう立案していくか等々、懸案は多岐にわたります。

次代の災害支援のあり方として、イタリアの事例が注目を集めています。日本と同様に自然災害が多いイタリアでは、キッチンバスやキッチンコンテナが大いに活躍し、日頃より調理トレーニングを受けたボランティアが有事の際に温かい料理を振る舞います。

また必ず食堂を設置するのが特徴です。食堂用テントへ人々が集まり、共に食卓を囲むことにより、相互の協力関係が維持され、孤独を防ぎ、地域住民の繋がりに貢献します。

今回の研修を終えて、道元禪師

の典座教訓「喜心」「老心」「大心」の御教えは、炊き出しのボランティア精神にも深く通じるものと改めて感銘を覚えました。

実習を振り返り、ご協力ご支援いただいた各宗師、並びに宗務所寺族会様・宗務所婦人会様に衷心より御礼感謝申し上げます。

(庶務 矢萩宗淳)



最安寺 ボランティア活動

昨年十二月三日、石川県能登町の最安寺様にてボランティア活動を行ないました。去る五月にも活動させて頂いた御寺院様で、全曹青副会長をお務めの高柳龍哉師によるコーディネートの下、当会会員三名が参加しました。

本堂や廊下の天井・壁・階段手すり・漆喰が剥がれた外壁の補修、堂内外の清掃を行なってきました。午後からは石川県曹青の会長さんもお加わり、作業を予定通り終わらせる事が出来ました。

今回参加された皆様、本当にお疲れさまでした。被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。(ボランティア委員長 二坂佳邦)



随聞会

二月二十六日、宗務所・禅センターにて「随聞会」が開催された。今回は『つなぐ』ということへの四つの視点、瑩山禅師の教えに触れながらと題し、大本山總持寺単頭・柴田康裕老師(十六教区・洞雲寺御住職)に御提唱頂いた。今期の秋曹青のテーマが「つなぐ」である事から、太祖瑩山禅師(以下「太祖」と略称)の祖録を中心に、明快な語り口で分かりやすくお話頂いた。

冒頭、總持寺西堂・青山俊董老師が九十歳を迎えてなご情熱をもって提唱され、従来は六十分だったのを、時間が足りないのと九十分に伸ばし、これが私の遺言だと思って聞いて下さいと雲水に語りかける——という逸話を披露され、その鬼気迫る熱意に圧倒された。まず、当時の僧堂のリアルな姿が垣間見える『洞谷記』の一節を御紹介頂いた。血気盛んでいきり立つ弟子を穏やかにいなす太祖・表面上は敬意を表しながらも聞き入れない弟子・後日、別の弟子に、どう諭せば良かったのだろうか、と尋ねる太祖：自由な雰囲気の中、弟子は

太祖に真正面からぶつかり、太祖も弱さや迷いを隠さない。『峻厳な太祖』という先入観が打ち砕かれ、新鮮な驚きを感じた。

安居中に限らず、祖録の提唱や講義を受けても私にはチンプンカンプンな事が多く、失礼ながら意味ねエなァ、と思つた事も少なくない。だがそれは受容する下地が自分に出来てないからであり、後になって『腹落ち』する事があるかも知れない。習つたという経験自体が大事なものだという。『伝光録』には「一器の水を一器に伝うるが如し」という言葉があるが、自分一人の器が小さくて老師の器の水が入りきらなくても、法友達と分担して水を受け取る事で、それぞれの宗侶の器に水が教えが受け継がれていく。という視点には、目から鱗が落ちる思いだった。

また、『洞谷山永光寺盡未来際置文』中の一節「今生の仏法修行は、此の檀越の信心に依りて成就す」はまさに現代でも寺檀の「理想の形」である。葬儀も年忌法要も、作法自体は同じ事の繰り返しだが、檀信徒にとつてはたった一度の機会かもしれない。葬式仏教おおいに結構、葬儀は最高の布教の場であり、宗侶にとつては一

番の修行の場だ。高祖さんや太祖さんの時代は二度と廻つてはこないが、み教えを現代に生かすのは我々なんだ。…ともすれば慣れきつてしまつていた自分に、喝を入れて貰えたと思う。

「良き友を得ることは、仏道の全体である」——『雜阿含經』の一節だが、『自分の殻を破る』修行は一人では無理がある。曹青で得た貴重な仏縁に感謝するとともに、柴田老師に心から御礼申し上げます。

(佐々木耕志)



書籍紹介

手塚治虫『ブツダ』

(一九七二〜一九八三年連載)

※潮出版社・講談社から文庫版が発行中



本作は《漫画の神様》の異名をとった手塚治虫(一九二八〜一九八九)の描いた、我々が尊称する

ところの「大恩教主本師釈迦牟尼佛」(以下「釈尊」と略称)の生涯を軸にした一大巨編である。手塚

は、釈尊の生涯における重要な場面を踏まえつつ、多くのキャラクターを創作して大胆に脚色し、壮大なストーリーを作り上げた。率直にいつて佛典とは程遠く、実際に反発の声も多々あったようである。しかし累計発行部数が二千万部を優に超え、今もなお新たな読者を獲得し続ける本作は、控えめにいっても《不朽の名作》という表現がふさわしい。何より私自身が本作を折に触れて読み返し、その度に感銘を受け続けている一人なのである。

私が最初に本作を読んだのは、十歳前後の頃だったと思う。元号が平成に代わって間もなく、当時読んでいた漫画雑誌に手塚の計報と追悼記事が載ったのを覚えているが、その頃に師父が買い揃えた本作全巻を、勧められもしないのに読破した。王家に生まれて思い悩む少年時代のシッタルタや、(手塚が大きく脚色した)ダイバダッタの過酷な子供時代に感情移入して読んだ記憶がある。自分の実年齢に近かったからだろう。二度目は大学生の頃、インド佛教専門の教授が、文献学とは程遠いが、手塚治虫の『ブツダ』は面白い、と言っていたので読み返した。その頃は佛教の知識を学

んでいたから、初転法輪・八正道・毒矢の譬え・知足・息子「アジャセ」によって幽閉された先王夫妻への教化……といった典拠を手塚が踏まえている事を知り、深く読み込む事が出来た。三度目は三十歳を過ぎた頃、アニメ映画が上映されたのをきっかけに読み返した。僧堂安居を経験した身として、釈尊が成道に至る菩提樹下での坐禅・村娘スジャータが供した乳粥・臨終の際の教えを収録した通称「遺教」(ゆいきょう)の文言等を深掘りして読めた。東日本大震災の直後だった事もあり、人間の無力さを感じたと思う。そして今回、本作を紹介するにあたって再び読み返したが、結婚して子を育てる立場の身としては、釈尊が両親・妻子を残して文字通り《出家》し、それが遠因となって王国が滅亡する描写に、複雑な思いを抱いたものである。以上、個人的な思いばかり書き連ねたが、僧侶であれば全ての年代で新たな発見がある名作だと力説したい。

手塚は当初、大作『火の鳥』の東洋編として本作を構想した。未完の超大作『火の鳥』を私は残念ながらまだ読んでいない。いつか必ず読みたいと思う。

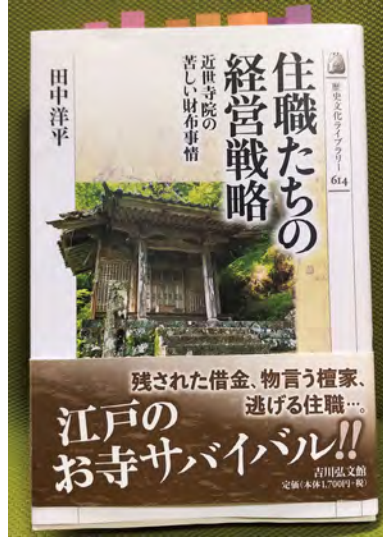
(佐々木耕志)



田中洋平・著

『住職たちの経営戦略』

近世寺院の苦しい財布事情



私事ですが、今年で住職を任ぜられてより十年となります。その間、お寺の運営というものに取り組み、頭を悩ませる日々が続いておりました。檀家や法要件数の減少、地域の人口減、環境や社会の変化など、情勢が千変万化する昨今です。寺院の「経営」という仏事行持とは別ベクトルの仕事が多く、のしかかる事も、住職という職務の厳しさであると痛感しております。聞けば、上座部仏教圏でも運

営での問題は大きいようです。財の所有が戒律にて禁じられているあちらでは、寺院の資産は篤信ある檀信徒に管理してもらうようですが、そこはやはり人の世なのか、持ち逃げや使い込みなどが多発し、やむを得ず戒を破って寺院の経理に携わる僧侶が出てきている、という話があるかと思います。こう考えれば、お寺とその経営の問題は、国内外問わず仏教全体がぶつかる問題であると

えましようが、これは現在だけの問題なのかと思うと、決してそうではなかったようです。今回ご紹介する本書の中で、このことが語られております。

崩壊の一端をたどっていると申せ、日本寺院は未だ檀家制度の中にあります。御存知の通り、江戸時代の寺請制度に端を発するものですが、一般的な理解ですと幕府の政策に組み込まれ、戸籍となる寺請を担うことによって、寺院の運営が安定したと思われがちです。事実、本書でも取り上げられる江戸時代の『世事見聞録』では、その権威を笠に着て居丈高に振る舞う僧侶が糾弾されたり、檀家の奥方を囲い込みながらも寺請による戸籍の証印を盾にされて声を上げられないなど、かなりの権力と財力を有していたことは事実のようですが、それはごく一部の寺院に限った話であることが、本書から分かります。

主に真言宗寺院のデータが多くなっておりますが、寺院には寺請を行う事の出来る、つまりは葬儀を執行できる寺院と、葬儀が許可されず祈祷法要のみが執り行える寺院があったこと。その檀家数も決して多くはな

く、収入全体の七割は朱印地、つまり耕作農地の収益によるものであったことなど、情報として知っていた寺請制度とはかけ離れた実体が多く語られています。

しかも、当時も檀家数の問題や村の人口減少から、江戸中期前後には寺院の無住化がかなり進んでいたことも分かります。その中で、放置された農地が地域の負担となつてのしかかり、その対処を行政を巻き込んで村長が進めるなど、寺院後継問題が地域全体の問題となつていた様子が見えてきます。

宗教的な生存戦略、運営的な長期展望に取り組んできた事例も紹介されておりました。当時の社会情勢や宗教界の状況など、今とは環境が違うかも知れませんが、こうした歴史の中から、今の問題を考えることも出来るのではないのでしょうか。

「経営戦略」と言いながら当時の寺院運営の実体を表すことに大部分を割いていることが物足りなくはありますが、檀家制度の歴史を知るに貴重な一冊であると思います。

(土屋泰順)

曹青秋田／第97号

発行／秋田県曹洞宗青年会

事務局／由利本荘市東由利蔵字蔵127 蔵立寺内 発行責任者／鮎川 義寛 編集責任者／佐々木耕志
秋曹青ホームページ <http://www.sousei-akita.net/>